

アタナシウス・キルヒャーによる中国語の起源仮説

ボレスロー・シチェスニアク

ノートルダム大学

東アジアはしばしばマグナ・タルタリアとも呼ばれ、16世紀の終わりから17世紀初頭にかけて、様々な学者が多く of 幻想的な仮説を膨らませた対象であった。この学者の中には、言語学の歴史にとって重要な書籍『*Thrésor de l'histoire des language de l'univers* (世界の言語の歴史の百科)』を書いた Claude Duret (1570-1611)がいた。これは1613年にケルンで出版された。彼の説明では、極東の言語(彼は中国語と日本語を念頭に置いた)は、動物や小鳥の言葉である非文節言語に属していた。この例のように極東言語や文明に関するヨーロッパでの知識の不足は、17世紀中頃になって中国や日本を訪れた宣教師や旅行者の数多くの報告がヨーロッパの様々な言語で出版されるまでは一般的なことであった。これらの報告書は当然、素人学者たちを中国文明の研究に惹きつけ、17世紀後半には専門の学者たちも注目するようになった。とりわけ中国やその他極東言語の起源が特別な興味対象となった。

17世紀後半になると、文字の研究者たちは「あらゆる文明の歴史は、人類共通起源の普遍文字を持つ」という人類の歴史の普遍性という理解にたどり着いた。したがって、中国の起源についての彼らの調査は当然文字の普遍性および他の国との古代文化の比較であった。

アタナシウス・キルヒャー(1602-1680)は中国文明および中国語の起源という長きに渡る論争と未解決の疑問を始めた人物である。しかし彼がこの問題に取り組むようになったのはエジプト学の影響によるもので、彼は人類そして古代文明の伝播はエジプトより始まったと考えていた。

アタナシウス・キルヒャーにとってエジプト研究は単なる過去への興味でも、未知の分野の発見を試みる歴史学者としての活動でもなかった。彼の興味は人類の過去の文明を探ること、特に彼が人類の創造の歴史に一番近いと考えていた古代エジプトについて、またノアの大洪水後の人類の拡散への興味からであった。

キルヒャーにとって、人類の始まり、そしてエジプトの古代の歴史を研究するための主要な資料は聖書であった。聖書は年代順に秩序立って始まりからファラオが君臨したエジプトまで、多くの観点で緻密に情報を提供している。エジプトは最初に生まれた高度な文明であり、彼の考えでは、シリア、ギリシャ、ペルシャ、インド、中国のようなその他の隣国に影響を与えた。

キルヒャーは数学だけではなく、神学、錬金術、哲学、天文学、地理学、魔術、医学の著作を行えるほどの大学者と自分を考えており、そして中東・極東研究でも専門家を自称していた。比較言語学が、彼をすべての古代文明の中で一番古いと彼が考えていたエジブ